

平成31年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859)

武蔵御嶽神社の富札^{とみふだ}

富札は江戸時代に流行った富興行、富くじ、^{とみつき}富突ともいわれる賞金付きくじに使われた紙の札です。今回ご紹介する武蔵御嶽神社発行の富札は、横4.6cm、縦16.1cmの厚手の和紙に、「七千式百八拾九」、「七千六百六拾壱」と大きく番号が書かれ、興行日の「戌五月十九日」(文政9年)、発行元の「御嶽山」、興行場所の「御蔵前閻魔堂」と刷られています。札の端には、3ヶ所に割り印が押されています。

富興行の仕組みは、紙の札に番号を書き、同じ番号の木札を作り、紙の札は市中で売り、特定の寺社で、特定の日に、木札を木箱に入れて、上部の穴より大錐^{おおい}をもって木箱の中の木札を突き、錐に付いて上がって来た札と同じ紙札を持っている者に賞金を出すというものでした。この仕組みは現代の宝くじに引き継がれていて、抽選方法こそ違いますが、今でも多くの人に夢を与えています。

富札や古文書から、武蔵御嶽神社も富興行を行っていたことがわかります。江戸時代初期には、幕府の財政が豊かであったため、寺社が修復や造営をする時に、資金を出してくれました。武蔵御嶽神社では、慶長11(1606)年に社殿が、幕府の直営工事として建てられました。その後、元禄13(1700)年にも台風で破損した建物を幕府の資金で修復しています。

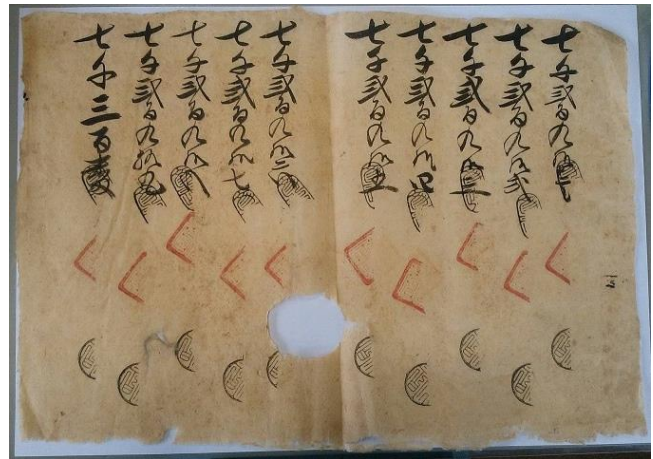
しかし、江戸時代中期の享保年間(1716~1735)以降、幕府の財政は窮乏し、寺社への造営資金援助が困難になります。そこで、寺社側も種々の手段を講じて、費用を捻出しなければならなくなっていました。富興行で得た利益を寺社の造営費用に充てることは、幕府公認の助成策だったのです。

安永7(1778)年に、武蔵御嶽神社は富興行の願いを幕府に提出します。その内容は、元禄時代に建立された社殿が大破してしまったので修復のため、富興行を許可してほしいというものでした。御嶽山は高山であり、普段から風が激しく、すぐに修繕しないと



富札

建物が壊れてしまう、と嘆願します。この願いは天明2（1782）年に聞き届けられ、現在の神奈川県横須賀市浦賀にある叶神社かのうじんじやで富興行が行われました。しかし、富札の売れ行きが悪く、興行は失敗に終わります。その後、文政4（1821）年に、江戸浅草蔵前にある華徳院閻魔堂での富興行が許可され、文政9（1826）年から開始されることとなります。



富札発行台帳の一部

富興行には、江戸に興行請負人がいて、一切を取り仕切ってくれました。興行当日は武蔵御嶽神社からも浅草の華徳院閻魔堂へ出向き、神主・御師による祈祷が行われ、富突となりました。御岳山の御師家には興行請負人と神主、御師との富くじに関する規定を書いた古文書が残されています。また、富札を発行した台帳の一部も残っており、そこには番号が控えられていて、割印を押した跡があります。

富興行は文政9（1826）年2月から文政12（1829）年10月までの間に12回行われました。富札一枚の値段は銀六匁もんめでした。この額は当時の職人が1日分に貰える賃金に相当すると云われています。一回の興行で9000枚～15000枚の富札を売り出しました。当り札は100枚で、賞金は金五両から金百五十両、両袖という前後賞もありました。武蔵御嶽神社の命運を賭けて行われた富興行の収益はどれほどのものであったのか、収支決算に関する資料は残されていないので、わかっていません。武蔵御嶽神社は、富興行以外にも開帳や勧化などを行い、修復資金調達の努力を積み重ねてきました。その結果、社殿や宝物が残り、その多くが文化財に指定にされて、今日に至っています。

（文責 小島 みどり）

* 武蔵御嶽神社は、時代により、武州御嶽蔵王権現社、大麻止乃豆乃天神社おおまつとのあまつかみのあしるなどの称号で呼ばれていますが、ここでは現在の名称である武蔵御嶽神社に統一しました。